

あとがき

この度、「琵琶湖ハンドブック」四訂版を、琵琶湖に関心をお持ちの皆さまにお届けできることを、心より嬉しく思っています。ハンドブックは平成18年当時、琵琶湖に関する知見を幅広く集約して、一つのいわば百科事典のような冊子を作成しようではないかという声があり、滋賀県庁を中心として起こり、琵琶湖環境科学研究センターや琵琶湖博物館も共鳴して初版がつくられました。初版以降、平成23年度に改訂版、平成29年度に三訂版を発行し、琵琶湖に対する理解を深めるための「道しるべ」として、多くの皆様に愛読されてきました。

三訂版の発行から7年が経過し、琵琶湖とその環境を取り巻く自然的・社会的状況は相当変化しました。地球温暖化・気候変動の影響が顕在化し、例えば琵琶湖の全層循環未完了や深湖底の貧酸素化状態などが生じるようになって来ました。グリーンインフラやネイチャーポジティブの考え方も急速に浸透しつつあります。また「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へのゴールである「マザーレイクゴールズ(MLGs)」が策定されたことや、森・川・水田・湖がつながる琵琶湖と共生する農林水産業である「琵琶湖システム」が世界農業遺産に認定されたことなども大きなできごとです。

四訂版では、これまで受け継がれてきた基本構成や内容を大切にしつつも、琵琶湖の魅力と課題を広範囲に紹介できるような項目を選定し、新たに蓄積された知識や見解をふんだんに盛り込むと同時に、上記の新しい環境変化や社会的動きについて、内容や最新の知見を加え解説をしています。

今回も四訂版の作成にあたり、琵琶湖に関わる多くの研究者のほか、長年保全活動に関わってきた方々や行政職員から多大な協力をいただきました。皆さまの知識と経験は、このハンドブックの内容を充実させるうえで不可欠なものであります。感謝の意を表します。

琵琶湖は多くの人々に愛され、長年にわたり守られてきたからこそ、今もその美しい姿を保っています。美しい琵琶湖を次世代に引き継ぐためには、私たち一人ひとりが琵琶湖の未来を共に考え、支えていくための行動が不可欠です。このハンドブックを通じて、多くの方が琵琶湖の魅力と可能性にふれ、より一層、琵琶湖への理解と関心を深めていただけることを心から願っています。

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター長 津野 洋